

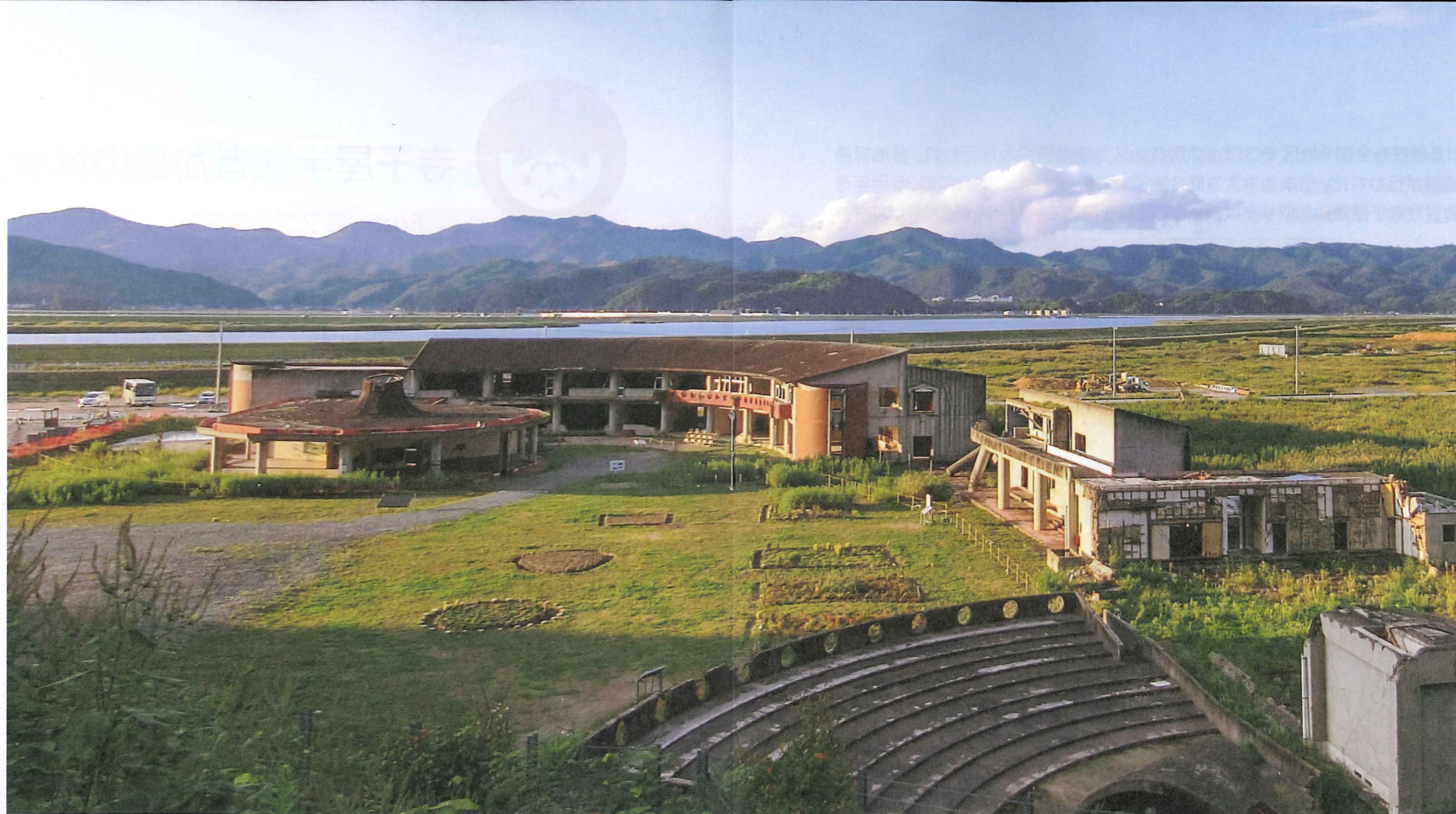
減災教育

プログラム

第5回 教員研修会

日本各地(15道府県)の教員が、東日本大震災の被災地で、防災教育の重要性とその効果を多面的に学びました。

- 日程: 9月17日(月祝)、18日(火)、19日(水)
- 場所: 宮城県気仙沼市、仙台市、石巻市
- 参加者: 助成校(小・中・高)20校の教員33名
- 主催: 日本ユネスコ協会連盟
- 協力: アクサ生命保険株式会社
- プログラム・コーディネーター: 及川幸彦先生(東京大学海洋アライアンス海洋教育推進センター主幹研究員)
- 研修協力: 気仙沼市教育委員会
気仙沼市立階上(はしかみ)小学校
気仙沼市立階上(はしかみ)中学校
特活) SEEDS Asia
- 後援: 文部科学省 (企画部: 上岡 あい)



震災遺構となった石巻市立大川小学校旧校舎

参加した先生の声

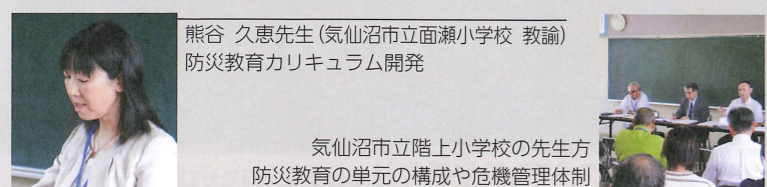
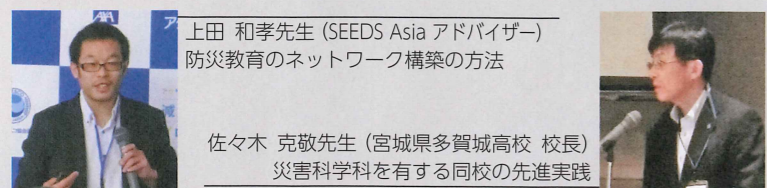
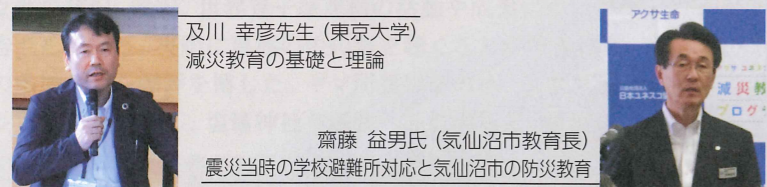
- 理論と現場の両方を備えた「生きた研修」でした。
- 百聞は一見にしかず。現場に来なければわからないことがたくさんありました。心に刺さりました。
- 及川先生の講義や最先端の防災教育の事例から、教育の果たす役割を再認識できました。
- 被災地の学校で子どもたちの明るく前向きな姿、皆で力を合わせて防災に取り組む姿を見て感動しました。
- ESDの視点を防災教育の根幹としてとらえる大切さに気づけました。
- 町の教育行政や地域の方々にも呼びかけ、防災教育の再構築を図り命を守る教育をしていきたいです。
- 全国の先生と意見交換し、思いを共有し、つながりが持てたことは貴重な財産になりました。

講義

理論・カリキュラム・先進事例

「訓練」から「教育」へ、そして「生きる力」へ

及川先生の講義では、防災教育を単に避難訓練などの防災行事や活動として捉えるのではなく、子どもたちの資質・能力を育む「教育」であることを再認識し、子どもたちのいまと将来・未来のために必要な「生きる力」を育むものであるべきだと伝えられた。また、新学習指導要領が目指す児童・生徒の能力・資質と、防災教育で育む能力・態度とが合致することや、ESDの理念や学習手法を防災教育に適用することで相乗効果が生まれることを学んだ。そして、防災教育は持続可能な社会の創り手を育成する主体的、対話的(協働的)で深い学びを生む教育であるという防災教育の新しい姿が提示され、参加者に大きな気づきを与えた。



現地視察

フィールドワーク①



震災遺構を直に見て、ご遺族の生の声から学ぶ

石巻市立大川小学校では、津波で74名の児童と10名の教職員が犠牲になった。犠牲児童のご遺族が、悲しみ癒えぬ中、当時の状況や防災教育への思いを語ってくださった。



被災地を感じ、犠牲者を想う

気仙沼市の杉之下地区で地元の方から当時の話を聞いた。海拔11メートルの市指定の一時避難場所だった高台に逃げ込んだ方々を含め、同集落で93名の住民が犠牲となり、その地の慰霊碑で手を合わせた。

学校視察

フィールドワーク②



参加教員の創造意欲を刺激した授業視察

気仙沼市立階上小学校での授業視察。5年生の「防災復興マップをつくろう」は、階上地区を4つのエリアに分け、自分の住むエリアの危険箇所や地形、避難道などを児童が調べ歩き、マップにまとめて発表する取り組みだ。中学生や地元住民からも意見を聞き、マップをブラッシュアップ。参加教員は、自校の授業に活かすため懸命にメモを取った。



防災教育で育まれた力

階上中学校の生徒。生徒が主体になって企画・実施している防災教育の取り組みを全国の先生に伝えた。堂々と自分の考えを述べる姿からは、防災教育で育まれた主体性やコミュニケーション力、対応力の高さがうかがえた。



生徒たちと意見交換

参加教員と中学生とが防災教育のあり方や課題について対話。大きな災害を経験した子どもたちからも学んだ。

振り返り

ワークショップ



学びを実践につなぐために

講義とフィールドワークで学んだことを、日本各地の学校の防災教育にどう活かすかについてディスカッションした。教員間の意識の格差、地域との連携、カリキュラム開発、校内事情、継続性など、学校で防災教育を行う際の課題も共有した。